

エマソンと宗派

大谷 多摩貴

I 序

18世紀末から19世紀にかけてのアメリカは、独立を達成、新しい共和国を樹立し、さらには英国やメキシコとの戦争にも勝利をおさめ、飛躍的に領土を拡大し一大国家となる。このような土壌は、アメリカの文化・知的面におけるヨーロッパからの自立を可能にし、アメリカは文芸においても独自の道を歩み始めることとなった。いわゆる American Renaissance の到来であった。

文学思潮におけるこのような流れは、新たな思想の誕生を可能にした。この時代の重要な思想の一つが超越主義 (Transcendentalism) であるが、この過去の「清算主義」ともいえる姿勢は、そもそも未開の大陸を開拓することで国づくりをし、母国との分離をとげることで独立を手に入れたアメリカ人に特有のものと考えられることもできよう。

本稿では、18世紀末から19世紀にかけてのアメリカ文学・哲学における超越主義の運動の代表的思想家であるエマソン (1803-1882) の宗教論 — 具体的にはエマソンの宗派⁽¹⁾やその教義に対する姿勢 — を検討してみたい。

第1節では「エマソンとその時代」と題し、彼の思想の背景やそれを培ったものを検証する。第2節では「エマソンとユニテリアン教会」と題し、彼の当時の教会に対する姿勢を検証する。第3節では、新たな思想の誕生を可能にしたこの時代の、同じくユニテリアン派の牧師であったシオドア・パーカー (1810-1860) の宗派に対する姿勢との比較においてエマソンの宗派に対する姿勢を検証する。

II 本論

第1節 エマソンとその時代

序論でも述べた通り、エマソンの活躍した19世紀のアメリカは、戦争に勝利し、領土拡大を成し遂げ、大陸国家としての安定を得た時代であった。一方、思想の面でも、これまでの実証主義的合理主義だけでは不十分であるという考えが現れ、支配的になっていく。とりわけ宗教の面では、これまで支配的であったユニテリアン教会の地位に疑問を投げかける動きが現れ始めた時期であったといえる。ユニテリアン派はもともとカルヴァン主義の批判から生まれ⁽²⁾、キリスト教においてかなりラディカルな立場をとっていた教派であっ

(1) 本論文では、「宗派」、「教派」、「宗閥」などの用語は、同義的に用いることとする。

(2) ユニテリアン派は、父と子と聖霊の「三位一体」説を否定し、父なる神のみを神と認め、イエスの神性を否定した。

たが、次第にその教義は従来の「歴史的キリスト教」のものに近づいていった。1830年代にはこのユニテリアン派にも不満を持ち、さらにラディカルな立場をとるグループが、このなかから起こってくる。このような立場の代表格がエマソンと言えよう。

第2節 エマソンとユニテリアン教会

(1) 生い立ち

エマソンは代々牧師を務める家系に生まれた。祖父の代まではCongregational派（会衆派）であり、父の代でユニテリアン派となった。ユニテリアン派は、もともとカルヴァン主義の批判から生まれ、教義上、反カルヴァン主義的なものとなっていたが、この家系には、「一貫してピューリタンの血が流れて」おり、「このピューリタン精神こそ、エマソンが祖先から受け継いできた生来の資質ともいうべきものであり、その後の彼の思想形成の豊かなる土壌となったものである」（市村，1971：171）。

また、若き日のエマソンの精神的支柱となった叔母メアリ・ムーディーの影響も忘れてはならない。彼の才能をいち早く見抜き、カルヴァン教徒らしい教育を施したのはメアリであった。エマソンは、大人になってからも、この叔母に自らの主張を書き送ったり、意見を求めたりしている。エマソンの超越主義の主張は、「叔母に培われた彼の精神の土壌に後年咲く花と言っているのである」（富田，1960：3）。「カルヴィン主義者ピューリタンの至高の徳は、神への絶対服従であり、言行一致の行為において、信仰の証しを立てなければならず、メアリ・ムーディーは、そのような人であった。彼女は、若き日のエマソンに「善行の実践の人」となるよう、教育したのである（市村，1994：188）。

(2) 牧師就任から辞任まで

エマソンは1829年3月ボストン第二教会副牧師に、それから数カ月後、同教会牧師に就任した。副牧師となったエマソンは、その説教のなかで、信仰を「せまい教義にとらわれず、理性や知性と矛盾しないもの」と解釈し、また、「革新を辞せずという彼の抱負」を述べている（斎藤，1957：41）。彼は人気の高い牧師であったが、そのリベラルな信条から、教会の他の牧師や、出身校であるハーバード大学の神学部の教授陣から危険視されていた。

このころ、エマソンは、「内なる神」を強調するようになる。これは、自らが牧師を務めるユニテリアン派をはじめとする教会側のいわゆる教派主義と一線を画す姿勢である。このころの日記にも、「内なる神」という概念が示されている。

精神と物質の対応関係（コレスポンドンス）により真理を直観的にとらえるのがエマソンの真理把握の方法であるが、それは倫理的また宗教的な面においても同様である。彼は1831年7月29日付の日記に「反省することは、いかなる媒体もなしに神から直接に真理を受けることである」と、また1831年12月19日付の日記に「私の精神は神から与えられる直接の啓示である」と記している。

このような考えから、エマソンは、1832年6月ごろに自ら牧師を務めるボストン第二教会に手紙を送り、聖餐式のやり方を改めたいという希望を述べている。この行為からも彼の内面世界と教会制度との間に大きな隔たりがあったことが伺える。教会の牧師である以

上、その職務として聖餐式を行わなければならない、しかし、彼の内面世界からくる声はその聖餐式を「すたれた形式」として受け付けない。

このような状況のもと、エマソンは、1832年9月、『主の晩餐』と題する説教をおこなう。このなかで、彼は、自らの超越主義の立場を明らかにしている。主の晩餐はユダヤ人のあいだで行われていた地方的な習慣であり、パンを食べぶどう酒を飲むという行為でキリストを偲ぶという象徴主義的な発想も、地方的なものにすぎないといい、「魂を束縛している外的な権威の虚妄性をひとつひとつ明らかにして、ついには魂の完全な自立をかちとろう」と試みている（酒本、1972：344）。さらに、彼は心をこめてすることのできないことは何一つしたくないと明言し、「魂を全面的に信頼し、魂に対する制約はいっさい拒絶する」という超越主義の立場を明確にする。

さらに、エマソンはその信条から、長い葛藤の末、1932年10月、ユニテリアン派ボストン第二教会牧師を辞任することになる。このころの彼の日記に、教派に対する考えが淡々と述べられている。

「自分は時々、立派な牧師になるためには、どうしても、牧師の職を去ることが必要だと考えることがあった。この職業は、もう時代後れだ。時代が変わっているのに、われわれは祖先のすたれた形式で礼拝している。ソクラテス的な異教のほうが、老衰し使いものにならないキリスト教よりは、ましなのではあるまいか。」（1832年6月2日『日記』）⁽³⁾

エマソンは、当時の教会の組織や儀式など、形式的なものにとらわれ過ぎている姿勢に疑問を感じたと考えられる。だからこそ「牧師の職を去る」ことが必要であるといい、「ソクラテス的な異教のほうが、老衰し使いものにならないキリスト教よりは、まし」であると日記に記しているのだ。酒本（1973：363-4）が指摘するように、「彼の内面はどんな形式と結びつくことも嫌って、おのれ自身になりたがって」おり、その形式を重視する教会やユニテリアン派からの決別へとつながっていく。

しかし、エマソンの教会に対する不信は、ボストン第二教会やユニテリアン派のみにとどまらなかった。前述のように、彼は教派そのものに対して疑問を抱くようになる。

「何か一つの宗教団体に属するということは、賢いことでも自然なことでもないように、自分は思う…もし賢明な人なら、世間に向って、自分はユニテリアンの信徒だと公言するようことはしないどころか、むしろ自分にむかって、自分はユニテリアンの信徒でも、またいずれの宗派のものでもない、言うであろう。」（1831年6月20日『日記』）。

宗派がわれわれの考えるほど根源的なものではないという発想が、同じ日付の日記の以下のたとえの引用からも読みとれる。

「心の中で自分をいずれの宗派からも切りはなし、これだけはっきりと自己を認識した

(3) 以下、本稿でのエマソンの日記からの引用は、富田訳による。

人が、たとえば乗合馬車に乗りこんで、いろいろちがった宗派の信徒に会ったとする。彼は、その人たちがどんな信条を話しても、うなずけないということはめったになかろうし、たとい、うなずけない場合があっても、それは言葉のうえの問題で、宗教的な気持の点では、まったく同感であろう。」(1831年6月20日『日記』)。

エマソンによれば、人間の内面からくる宗教が重要であり、表面的な宗派(やその儀式)はあくまでも副次的なものである。だからこそ自分を宗派から切り離し、自己を認識すれば、どんな人でも「宗教的な気持の点ではまったく同感」であると主張するのだと考えられる。

さらに、彼は考えを発展させ、宗派や宗教団体の実態を追究しようとする。

「宗派とか宗教団体というものは、人間から考える手数をはぶくために工夫された、お上品な匿名者なのである。」(1831年6月20日『日記』)

また、「宗教は、魂の神に対する関係である。したがって宗閥の発達、宗教の衰微を示すものである。」(1831年6月20日『日記』)と述べている。

人は、特定の宗派や宗教団体に所属することによって、それに力を与え、その儀式などの形式的な側面を重視し、宗教の本質を考えなくなる。内面世界ではなく、外的なものに支配されるようになってしまう。これは、真理を直観的にとらえるエマソンの真理把握の方法と対立することになるのである。

このような発想は、エマソンの超越主義的な思想をよく表している。すなわち、「根源にいたるとびらは常時万人のまえにあげ放たれているが、しかし神託を受けるには直観によることが絶対の条件であって、二番煎じは許されない」という発想である。これについて酒本は「この根源への信仰が失われると、とたんに墮落が始まり、制度が絶対視されて、ごく少数の人間にしか神性が認められなくなる。」と断じている(酒本, 1972: 359)。

エマソンはその後もこの考えを持ち続けたとみられる。後年エマソンが日記に記すことになる「神はその神殿を、教会と宗派の廃墟の真只中に建てる。」(1846年3月24日『日記』)という言葉は比喩的な表現ながら、エマソンのかわらぬ思いをあらわすものだろう。

(3) 『神学部講義』にみる宗派に対する姿勢

1838年7月15日に行われた『神学部講義』(‘Divinity School Address’)は、ハーバード大学神学部のノートン教授などによって厳しい攻撃を受けることとなった。この講演は、エマソンが、これから牧師職に就くことになる神学部の学生に、自らの宗教に対する考えを説いたものであるが、彼はこのなかでも、教派や教会組織について言及している。

「史的キリスト教は、魂の教義ではなく、個人的なもの、実証的なもの、儀式的なものの誇張である。」⁽⁴⁾

(4) 斎藤光『超越主義』, p.137より引用。以下、同書からの引用はページのみを記す。

教会の推奨してきた「史的キリスト教」は、教会の存在の意義や儀式的なものを重視し過ぎる。しかし、本来、宗教はそうあるべきではない⁽⁵⁾。ここから、次のような結論が導き出される。

「名前や場所、土地や職業ばかりでなく、徳や真理まで、教会により占有独占されるのを見るよりは、いっそのこと、古びた信条に養われた異教徒になった方がよい。」(138)

要するに、「教会はイエスの原理をではなく、彼がただの比喩として用いた片言隻語を絶対視し制度化してしまった」ということである(酒本, 1972: 359-60)。

(4) 晩年

ここまで、エマソンの宗派に対する見解を検討してきた。それによると、宗派は宗教を衰弱させ、人間から考える力を奪うものであり、決して望ましいものではないということであった。彼の宗派に対する懐疑的な見解は一貫していたようであるが、晩年、彼の思想は幾分和らいでいるようである。

1861年の日記には、以下のような記述がみられる。

「宗派はストーヴだが、火はすべての宗派を通じて昔ながらの属性をもちつづけている。」(1861年2月『日記』)

晩年のエマソンは、その超越論的立場を保ちつつ、やや妥協して、宗派が決して本質的なものではないが、それなりに機能するものであると考えているように思われる。この発想は、後述するシオドア・パーカーの思想に近いように思われる。

第3節 パーカーの宗派に対する姿勢との比較

シオドア・パーカーがシャックフォードというボストンの若い牧師の就任式で‘A Discourse of Transient and Permanent in Christianity’なる説教をしたのは1841年のことであった。後にJ・F・クラーク編でユニテリアン協会出版から『宗教論』として出版されることになるこの説教は、パーカーの宗教(キリスト教)に対する姿勢—すなわちユニテリアン正統派、ひいては教派主義全般への絶対視の否定—を見事に表している。彼は、この教派主義を「過ぎゆくもの」と位置づけ、「真のキリスト教」を「永遠なるもの」として、両者を対比させながら論を進めていくのである。以下に、このなかから直接、宗派や儀式に触れている部分を取りあげ、検証してみたい。

「…イエスのキリスト教は永遠のものであるが、一世紀において、あるいは十九世紀において、教皇や教理問答書、教派や教会と結びついたキリスト教として通っているものは、

(5) エマソンは、『日記』でもキリスト教の歴史について触れている。「自分はキリスト教の歴史には、何の興味ももっていない…自分は現象をそのまま受け入れ…その影響に身をまかせるのである。」(1836年3月5日『日記』)

過ぎゆくものである。」(159)

パーカーは、イエスの説いた教えは真理であり、普遍のものであるが、その後の「キリスト教」と呼ばれる教派や教会の教義は一時的なものであると主張している。さらに、それらを「つかのまのかげろう」と言い切る。

「教派と説教壇と社会のキリスト教は、つかのまのものであり、はかないかげろうである。…一つ一つは真理のある面を表わすであろうが、全体を表わすものはない。」(180)

しかし、この「過ぎゆくもの」が往々にして「永遠なるもの」よりも目立ってしまうとパーカーは指摘する。

「過ぎゆくものが、ふつう宗教として教えられているものの大部分をなしているということを、悲しいことながら、告白しなければならない。」(157)

「儀式と教義に不当な地位が与えられていることが多いのに対して、魂の神聖な生命、神への愛、人への愛が強調されることがあまりにも少ないのだ。」(157)

パーカーは、彼の言う「過ぎゆくもの」が一般的には目につきやすく、また重視されがちで、「永遠なるもの」が忘れられがちであることを強調する。したがって、この「過ぎゆくもの」である各教派の儀式や教義が、そのまま宗教ととられてしまうのである。

さらにパーカーは、これまでのキリスト教の教派が彼の言う真のキリスト教と相容れないものであったことを指摘する。

「キリスト教は個人の持つ天才や性格の聖なる特殊性を虐待するものではない。しかし人間を拘束しないようなキリスト教教派はない。」(177)

しかしながら、パーカーは儀式をことごとく否定するわけではない。儀式もある意味では有用で、われわれの信仰を助けてくれる。しかし、それはあくまでも補助的なものであり、本質的なものではない。

「宗教の儀式は有用で美しいかもしれない。宗教形式は、魂に語りかけるときはいつも有用で美しい。そして儀式が欠けている場合その償いをする。われわれの現状においては、ある儀式はおそらく必要であろう。しかし儀式はキリスト教の付属物にすぎず、その実体ではないのだ。」(157)

「人間が真の宗教…を持つかぎり…その人は、それを何と呼ぼうとも、真の宗教を持っているのだ…一種類の愛しかないように、一種類の宗教しかないのだ。もっともこの宗教が、儀式や教義や生命において現れる形はきわめて多様である。」(159)

この思想は、晩年になり、教派に対する懐疑的な姿勢が幾分和らいできたころのエマソンのものに近いように思われる⁽⁶⁾。

「…たまたまあなたがたの教派や教会で広まっているキリスト教の考えを、ただそれだけの理由で、あなたがたが受け入れ、そうすることによって神の真理の代わりに人間の命令を受け入れるならば、それだけでいつも、健全な判断、思慮、良識をほめられるであろうし、そのためにキリスト教徒と呼ばれるであろう。しかしもし、これだけをあなた方が頼りにしているのなら、大変なことである。」(182-183)

以上の考察から、エマソンもパーカーも、宗派やその教義、儀式を核心的なものとは見做していないことが分かる。若き日のエマソンは、宗派やその儀式を嫌い、牧師職を辞任した。後年になり、彼はやや妥協し、宗派をストーヴにたとえている。パーカーも、宗派を完全に否定はせず、それが本質的なものではないということを忘れてはならないとしている。

結論

本論文では、エマソンの活躍した時代が、これまでの実証主義的合理主義だけでは不十分であるという考えが現れ、新たな思想の誕生を可能にする土壌が培われた時代であったことを述べた。このようななかで、超越主義の立場から、当時の教会の推進する宗教観に疑問を抱いたエマソンの宗派やその教義および儀式に対する姿勢の検証を試みた。その結果、エマソンは、「内なる神」⁽⁷⁾の存在を強調し、形式主義に偏りがちな宗派やその教義、儀式を核心的なものとは見做していないことが分かった。若き日のエマソンは、このような宗派や儀式を嫌い、牧師職を辞任するに至った。後年になり、彼は、やや妥協し、宗派を本質的なものではないとしつつ、一定の存在価値を認めるようになる。しかし、それはあくまでも副次的なものであり、宗教の根幹をなすものではないとの主張は変わらなかった。このような姿勢は、同時代のユニテリアン派の牧師、シオドア・パーカーにもみられ、超越主義思想の現れであると論者は考える。

参考文献

- 市村尚久『エマソンとその時代』玉川大学出版部、1994。
エマソン『エマソン論文集』(上)酒本雅之訳、岩波書店、1972。
エマソン『エマソン論文集』(下)酒本雅之訳、岩波書店、1973。
エマソン『精神について』入江勇起男訳、日本教文社、1961。
エマソン『人間教育論』市村尚久訳、明治図書出版、1971。

(6) 前出のエマソンの日記のなかで、宗派をストーヴにたとえていることから明らかである。

(7) 本論文では、エマソンが影響を受けたと考えられる東洋思想、とりわけヒンドゥー教の思想には触れなかった。しかし、詩人としてのエマソンの代表的な作品『ブラーマ』にも主体と客体との合一、すなわち神と人間との合一というヒンドゥー教の思想が現れている。エマソンとヒンドゥー教の思想についての考察は別の機会に譲りたい。

斎藤光『エマソン』 研究社出版，1957。

斎藤光『超越主義』 研究社，1975。

長坂昇『「生きる」って何だ』 東京図書出版会，2002。

ペリー編『エマソンの日記』 富田彬訳，有信堂，1960。

〔抄 録〕

エマソンと宗派

Emerson and Christian Denominations

本稿では、アメリカ文学・哲学における超越主義の運動の代表的思想家であるエマソンの、キリスト教の宗派やその教義に対する姿勢を問題にしてみた。

自らも牧師職にありながら、当時の教会のあり方や教派・儀式への懐疑的な姿勢を、生涯にわたりつけていた『日記』や神学に関連する代表的な著作である『神学部講義』などの記述をもとに検証を試みた。

本論の第1節では彼の思想の背景やそれを培ったものを、第2節では彼の生い立ちを踏まえたうえで、彼の当時の教会に対する姿勢をそれぞれ検証し、第3節では、同じくユニテリアン派の牧師であったシオドア・パーカーの宗派に対する姿勢との比較においてエマソンの宗派に対する姿勢を検証した。

エマソンのいう「内なる神」とは何か、また、「内なる神」と特定の宗派への帰属を掲げる教会およびその教義との関係について問題にし、考察を試みたものである。